「国際協調主義と国粋主義とのあいだ：島崎藤村の南米（下）なぜ日本ペンクラブ初代会長は1936年ブエノス・アイレス講演で雪舟を論じたのか」
『あいだ』142号, 2007年11月20日、16-23頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第52回

国際協調主義と国粋主義とのあいだ：島崎藤村の南米（下）

なぜ日本ペンクラブ初代会長は1936年ブエノス・アイレス講演で雪舟を論じたのか

ワシントンからのメモランダム 7
(Memo randum from Washington No.6
: as of Sep.16, 2007)

稲賀 繁美
（いなが しげみ／国際日本文化研究センター研究員，総合研究大学院大学教授）

岡倉天心の影

南米アルゼンチンのブエノスアイレスで，島崎藤村は1936年に雪舟についての短い講演を行った。その内容をスペイン語から日本語に戻したものは，藤村全集で容易に確かめることができる（筑摩書房全集［昭和42年］13巻［以下「旧全集」と呼ぶ］：418-420）。したがってここでは，論旨に最低必要な論点を確認するにとどめよう。最初に，藤村は雪舟という東洋の禅の画家を，ヨーロッパ・ルネサンスの最高峰といわれる巨匠に匹敵する存在として比較する。西洋ではミケランジェロが藝術と宗教との結合を達成したが，東洋でも雪舟は同様に宗教と藝術とを総合した。表現の激しさや純粋さにおいては，むしろジョットーに比類すべきかもしれない，と藤村は述べる。西欧の美の規範が普遍的に信望されていた当時にあって，知られざる東洋の巨匠を説明するのに，西欧で親しまれた巨匠に類比するのは，説明の便宜として好都合だろう。そのうえで藤村は，雪舟が中国の現実の風景に接した体験を踏まえていることを強調する。北方では蒙古による破壊行為に驚くとともに，南方ではあらたな宗教と藝術の開花に接し，雪舟はそれを取り入れた，として藤村は画家の中国体験を重視する。その含む意味については後に検討したい。第３に，藤村は雪舟に「偶像破壊主義者」iconoclastを見る。そこから「日本の近代精神は，雪舟にその最初の表現を見出した」との，明治維新を体験した日本の近代作家ならではの，藤村の持論が導かれる（同上：420）。「近代生活の潜在的情熱と，それに対する熱望は，伝統の殻を破って，その火でもって精神の自由の領域に入りこまうと，ただひとへに燃え上がる機会をうかがってゐたのであります」。精神的自由を発揮した歴史人物による「因習打破」に「近代」の徴候を見るこの見解は，「夜明け前史観」として，従来ともすれば，あまりに図式的な紋切り型で，批判的に嘲笑されることも多かった。だがその真意はどこにあったのだろうか。

ここで藤村は岡倉天心に言及している。「雪舟のすぐれた作品は，単なる自然の模写ではない」「その一筆一筆は生と死の瞬間を持ち，全体はひとつになって生のなかの生という思想［イデア］を新はしてゐる」。この２箇所の引用は，ともに天心が最初のインド滞在前後に執筆したと推定される『東洋の理想』（1904）から取られている。英文原文を引いておこう。“a great work by Sesshu (…) is not a depictment of nature.” “Each stroke has its moment of life and

藤村が訪れたアルゼンチンの日本人移民村

death; all together assist to interpret an idea, which is life within life." 前半ではdepictmentという見慣れない単語（天心の造語？）が，藤村講演のスペイン語訳の反訳では「模写」になっている。後半は，禅画の筆致について，天心ならでは押韻を踏んだ詩的表現が横溢しているが，日本語では容易には伝わらない箇所といってよい。藤村は岡倉天心を「日本のキンケルマン」と賞賛し，その『茶の本』(1906) をスペイン語に訳されるべき名著として，9月15日の日亜文化協会に招待された際に推薦している（同上：412）。とはいえ，これだけでは藤村が雪舟を選んだ理由の説明にはなるまい。『東洋の理想』は日本美術史の沿革を述べた著述であり，禅宗の山水画家たる雪舟を，日本美術史のなかで，「日本を代表する画家」と特筆大書しているわけではないのだから。

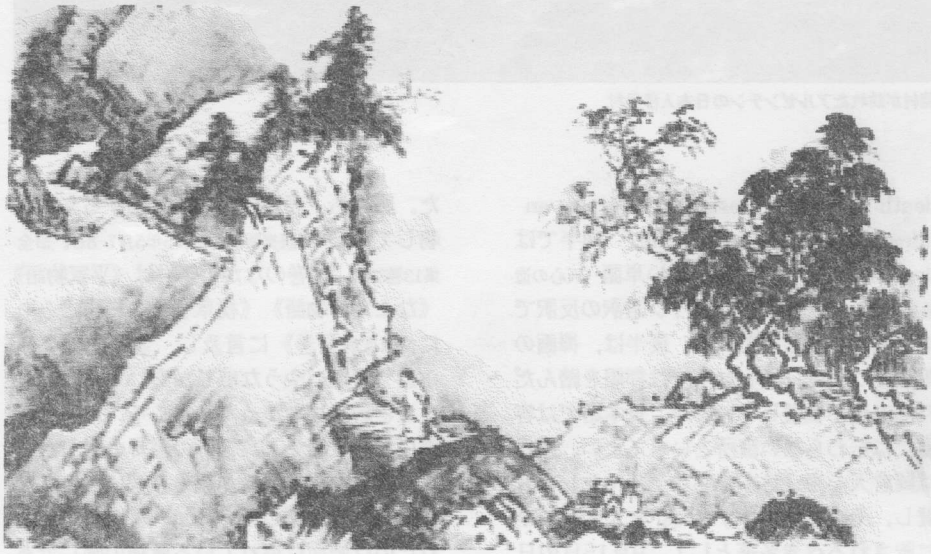
雪舟評価の確立

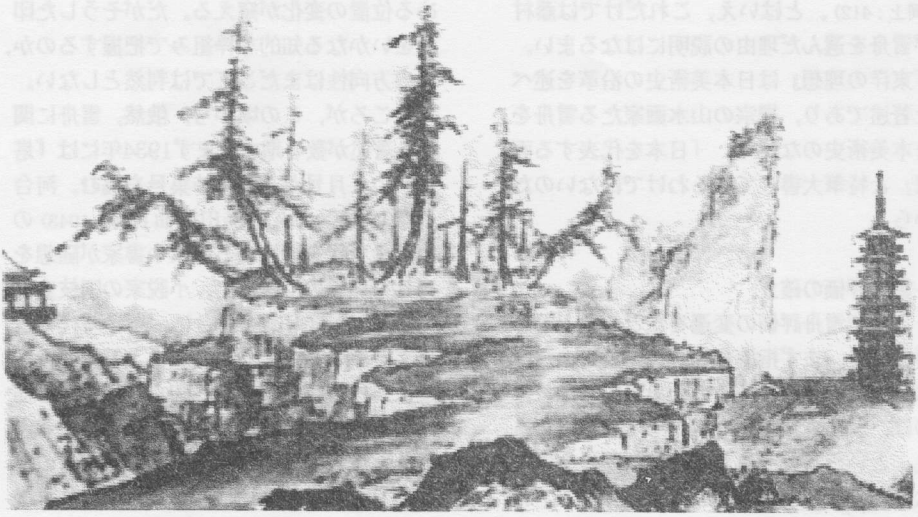
ここで雪舟評価の変遷をたどることが必要となる。まず指摘すべきは，雪舟の《山水長巻》がひろく一般の公衆の眼に触れたのは，ようやく1929年になってのことだった，という事実だろう。読売新聞社主催により上野の博物館で開催された「名寶展」は美術工芸を広く含めた画期的な展覧となった。藤村も「名寶展一瞥」と題する文章を物している（『読売新聞』昭和5年5月7-8日。旧全集13巻331）。絵巻のなかで藤村は《平家物語》《なよたけ物語》《枕草子》の白描とともに，《山水長巻》に言及し，雪舟には「何か近づき難いやうな感じがあつて私には長いこと親しめなかった」ところ，先年，山陰に旅して石見・萬福寺の雪舟の庭などを見てから，雪舟の絵が親しみ深いものとなったことを回顧している。「私の心をひかれたのは画面に現れている蘆荻の感じである」と見え，藤村のなかで雪舟の絵画の占める位置の変化が窺える。だがそうした印象をいかなる知的な枠組みで把握するのか，その方向性はまだここでは判然としない。

ところが，この頃から，俄然，雪舟に関する著述が数を増す。まず1934年には『塔影』の9月号が，雪舟特集号を編む。河合玉堂（1873-1957）や島田墨仙（1867-1943）のような当代を代表する画家や書家が随想を寄せているのに並んで，小説家の国枝史郎（1888-1943）は中国を舞台に，留学時代の雪舟が，旅の途上で女の妖怪によって妖術の罠にかけられながら，我知らず水墨画で描いた剣の絵の霊力によって危機を脱するという，怪異短編小説を寄せている。そのかたわらでは，美術研究所勤務の田中一松（1895-1983）が雪舟の《花鳥画屏風》（当時，

大橋新太郎蔵。現在，京都国立博物館蔵）の真偽という微妙な問題に関して，慎重かつもって廻った議論を展開している。世間の雪舟への注目に伴って，真贋問題が，所蔵者や先行学説への遠慮と裏腹の話題となっていた様子も悟られる。ペン倶楽部成立前年のこうした動向に，藤村がおよそ無関心だったとは，むしろ考え難い。

雪舟は中国留学中，高く評価され，同時代，16世紀の明の宮廷からも公式の注文に恵まれた。自分たちの先祖が，日本のみならず，とりわけ当時は文明の中心とみなされた中国において，外国人たる不利をものともせず絶賛されたとなれば，鼻が高い思いをした日本人は多かったことだろう。くわえてアーネスト・フェノロサも，遺著となった『東亜美術史綱』（1921年日本語訳）で雪舟を同時代の中国文化圏における傑出した





雪舟　山水長巻（「四季山水図」部分）毛利博物館

画家として扱い，東西世界美術史においても六指に入るとする評価を下していた。日本美術史においてこのような国際的名声を博した画家は，近代以前ではまことに例外的といえるだろう。30年代に入るとこうした雪舟の位置が，東亜の盟主たらんとする日本人たちの自尊心をことさら擽る存在として注目されるに至ったことも，不思議ではあるまい。

第二に注目すべきは，日本の学者たちが日本固有の美学を室町時代の中世に見定めるようになるのが，同じ30年代半ばのことだった，という事実だろう。当時少壮の蓮実重康(1904–1979)もまた1934年に「雪舟の自然観」と題する文章を『漆と工藝』3月号に発表している。雪舟に「東洋人の代表的一典型」の画家をみる蓮実は，当時，和辻哲郎の強い影響下にあり，和辻の禅仏教理解を雪舟に当てはめようと腐心している。「空すなわち絶対的否定の実践的体得」と和辻が説く禅の精神を，蓮実は雪舟藝術の本質的理解に援用する。藤村もまた，1935年，和辻哲郎が岩波書店の『思想』誌に掲載した哲学的思索の幾つかを高く評価していた(全集13巻，337,381など)。興味深いことに，ほどなく「日本的なるもの」をめぐる特集が同誌で編まれることになる。それに先立ち東北帝国大学の岡崎義恵(1892–1952)は『日本文藝学』(1935)で，「幽玄」や「冷え寂び」に中世国文学理解のための鍵となる術語を見出していた。この考えには東京帝国大学国文学教室の久松潜一(1894–1976)が賛同を表明する書評を寄せているが，その一方でマルクス主義の立場をとる近藤忠義(1901–1976)は，同様の審美学的術語に中世の封建性格の証拠を見出して，これを否定的に評価する見解を示していた。だが肯定・否定の差こそあれ，どちらも足利時代の中世美学に，日本精神の具現を見出していたことでは，共通する。数年後には，大西克禮(1888–1959)が現象学的美学の立場から『幽玄とあはれ』(1939)の歌論分析につづき，『風雅論「さび」の研究』(1940)で芭蕉俳諧へと考察の対象を延長させることになる。島崎藤村が室町中世に「もっとも典型的な日本」を見出した背景には，このような，同時代の学会の最新動向が，あきらかに共鳴している。じっさい，藤村は岡崎の『日本文芸学』刊行を寿ぐ文章で，「有心と幽玄の考察」には「中世時代の文藝から近代のそれへかけての間をつなぐ好き距離」(「好き距離」旧全集13巻320；島崎藤村全集[新版，昭筑摩書房，和57年]12巻90)を見て取っている。この事実は，藤村の南米講演を理解するうえで，ひとつの補助線となるだろう。

第三に，東洋美学を確立しようとする動きが何人かの著述家にみられるのも，正確に同時代のことだった。そのひとり，金原省吾(1888–1958)は1931年に『東洋美学』を世に問うていたが，「東洋美学」なる術語は，著者が世界に先んじて提唱したものと自負していた。この著書で金原は，東洋美学を現代において具現するのは日本にほかならない，とする国粋主義的な見解を表明して憚らない。かれによれば，かつて東洋の中心であった中国やインドはいまや凋落のさなかにあり，もはや「正統なる東洋」文明の体表者とは見なされないのだという。こうしたいささか誇大妄想的にまで自己中心主義的な美学構想，そして日本をして東洋美学の究極の具現とみなす自己正当化の姿勢は，大日本帝国軍部の中国大陸進出の拡張志向と密接に並行して，同時代的に彫琢されていった。

雪舟に，同時代の中国の画家たちをも凌駕する天才的力量を認めるような見方もまた，このような時代風潮のなかで，日本人たちの自尊心を擽る逸話として成長を遂げたことは，否定できまい。それは，日清戦争戦勝にいたるまで，日本人の心性のなかに深く刻まれてきた劣勢複合の島国意識の，いわば裏返しでもあった。はたして島崎藤村は，雪舟評価と不可分の，こうした日本人の隠された傲慢さに，どこまで意識的だったのだろうか。いずれにせよ，文化英雄の国際的名声が，民族主義の鼓吹や，偏狭な国粋主義の増長に容易に手を貸し，世論操作の道具に利用されがちなことは，忘れ

てはなるまい。

「偶像破壊主義者」と近代の黎明

最後に第四として，藤村の雪舟に関する講演と，それに先立つ近代日本文学にかんする講演とに共通する論点を確認しておこう。雪舟のみならず賀茂真淵(1697-1769)や本居宣長(1730-1801)といった国学者にもまた，藤村は「偶像破壊主義者」の姿をみとめていた。「これらの熱烈なる古典探求者こそ明治維新へと導いた近代思想の指導者たちであったのです」(旧全集13巻417，白山孝久訳，新全集には収録なし)。かれらはたしかに物理的には西洋から隔てられてはいた。だが本居宣長の「自然[おのづから]に帰れ」とジャン=ジャック・ルソー(1712-1778)が『ヌーヴェル・エロイーズ』に綴った思想とには並行がみられる，とするのが藤村の見解だった。(ちなみに小林善彦によれば，ルソーの著作には「自然に戻れ」との言葉は見られず，これは日本におけるルソー誤読の典型ともされる解釈だが，誤読の起源はまだ詳らかでないらしい)。日本近代文学に関する講演でも，藤村は真淵や宣長のうちに，「封建政体下の社会条件」に生まれた「近代生活の潜在的情熱」を見て取り，それが「伝統の殻を破り，その焔を以て決定的に日本民族解放の情勢を純化しようと」機会をうかがっていたものだと主張していた。いずれも，前近代日本の精神的発露のうちに近代性の徴候，そして萌芽を認める主張である。

さらにこの文脈で藤村が松尾芭蕉に言い及んでいることは，看過できまい。俳聖・芭蕉の名や作品がすでに西洋にも知られていることを前提として，藤村は芭蕉こそが「現在にまで引き続き生きてゐる象徴形式を打ち立てた人であります」(同417)として，芭蕉により確立された象徴主義が，今日なお息づいている，とする見解を述べている。ここで藤村が言外に依拠しているのは，おそらく間違いなく野口米次郎(1875-1947)が英・米国での講演で披瀝していた芭蕉解釈であり，それに基づいた独自の翻訳だっただろう。実際，What is symbolism if not 'the affirmation of your temperamentin other things'とする語句が，野口の英文講演による芭蕉解釈に見える(Noguchi Yonejiro, The Pilgrimage, 1909:193)＊1。フランス象徴派が19世紀末に達成した詩的言語は，20世紀初頭になって欧米圏でも人口に膾炙し始めていた。その最新の詩的言語理論に寄り添う術語によって，野口米次郎は，欧米の詩人や知識人たちに，芭蕉を説明していた。それは，詩の理論における芭蕉の世界史的先駆性を主張するとともに，その紹介者たる野口自身をも，東亜を代表する詩人として，世界の桧舞台に立たせる役割を担った論説だった。

戦前期においてYone Noguchiが日本の詩文学を英語圏の世界に紹介した功績には侮り難いものがある。そしてそれは，藤村が日本ペン倶楽部創生に際してその使命としたところとも重なり合う。実際，1935年11月26日の倶楽部発会式での談話においても，藤村は，西洋で東洋文学がどう受容されているかの現状について最新の報告を得るためにも，野口米次郎を招待してはどうか，と期待をこめて提案していた(旧全集13巻193)。

野口米次郎は，世界的な彫刻家として名を残したイサム・ノグチの父である。だがその運命ほど皮肉なものはなかっただろう。若き日のヨネ・ノグチは，西洋に日本の詩を知らしめることにかけて，代替不可能な使徒の役割を果たしており，少なくとも戦前期の日本では，東洋人として初めてノーベル文学賞を受賞した，インドの詩人ロビンドロナート・タゴールと並んで持て囃される著名な文化人にして「日本が誇る世界的な東洋詩人」だった。だが戦争期にいたって，野口米次郎は日本の国策の文化的な棒担ぎを自らの使命とする，偏狭なる超国家主義者を率先して演じ，タゴールとも対立し，狂信的な国粋主義を鼓吹した最悪の扇動家との汚名をそそぐ暇もないまま，戦後ほどなく失意のうちに他界している。＊2

ここでもまた，国際認知を求める渇望や

国際的名声の確立は，自己中心的な国粋主義と裏表の関係にあった。日本文学さらには東洋文学を国際市場において認知させたいと望んだ藤村自らの使命感にも，野口米次郎の不名誉なる命運と同様の危険が潜んでいた。実際，敗戦後になると，藤村晩年の『東方の門』は，野口糾弾の論調と同様な視点から批判されてきた。著者の死によってこれが未完の遺作となり，岡倉天心の業績を顕揚するがごとき言辞が綴られることなく済んだことが，辛くも藤村を失墜から救ったとする解釈が，専門研究者たちのあいだでは，いささかの安堵を交えて，今日も受け継がれている。

雪舟から芭蕉へ

だが，こうした角度からのみ，藤村のブエノスアイレス講演を評定するのでは，藤村の意図の過半を見落とすことにも繋がりかねまい。この点に触れて結論に代えたい。

周知のとおり松尾芭蕉(1644-1694)は，『笈の小文』(1687)で，自らに至る「風雅」の伝統を提唱していた。「西行［1118-1190］の和歌における，宗祇［1421-1502］の連歌における，雪舟［1420-1506?］の絵における，利休［1522-1591］が茶における，其の貫通する物は一なり」。その直後には「造化に従い，造化にかえれとなり」と見え，藤村が雪舟から宣長にいたる系譜に近代への息吹を見た際にも，同様の詩的自然観の継承を念頭においていたらしいことが推測される。芭蕉が自らこの系譜の正統なる後継者をもって任じていたことも，疑いないが，この一節は，先に述べた蓮実重康の雪舟論の冒頭にも引かれており，当時ちょっとした流行だった様子も窺える。だがこの一節を導きとして日本文学史の骨格をなす知的系譜が提唱されたのは，実は1920年代以降のことと見てよいようだ。とりわけ中世の「侘び」から芭蕉の「寂び」への継承と展開とが重視されるに至った背景には，最近，鈴木貞美氏が『生命観の探求』＊3で指摘したところによれば，歌人，大田水穂(1876-1955)の『芭蕉俳諧の根本問題』(岩波書店，1925，改訂版1927)に代表される一連の著作の果たした役割が大きかったらしい。

さて藤村は，よく知られるとおり信州は馬込の出身だが，大田水穂も同じ信州は諏訪の出身であり，同窓の後輩にあたっていて，両者には親交があった。ブエノスアイレスを後にしてブラジルに立ち寄った藤村にとって，大田水穂夫妻の親戚筋にあたる指旗深志夫妻をサンパウロ郊外の農場に訪ね，大田から託された家信を故郷の手土産とともに手渡した体験は，南米旅行の全道中でも特筆に値する出来事だった。指旗は大田夫人の弟にあたる人物だった。指旗夫人の手記によれば，島崎と有島が登壇した講演会には壱千人近い日系の聴衆が遠路をものともせず衆参したという。信州からだけでも，当時四千名を超える入植者がブラジルに生活の糧を求めていたらしい(全集13巻421-2)。

大田水穂とその親類縁者を結ぶ交友の輪は，地球の裏側にあって，藤村の芭蕉への思慕をいやましに募らせるものだったはずだ。というのも，藤村夫妻は神戸からの乗

1936（昭和11）年，アルゼンチン・ペン大会に出席ののち，ブラジルに向かう。船上の藤村夫妻（中央）と有島生馬。

船に先立ち，わざわざ大阪・紫雲楼に一夜の宿を借り，芭蕉終焉の地，久太郎町を訪れているからである。藤村は「おそらく青年時代から自分を励ましてくれた古人は，今また遠く行く自分を導いてくれるであらうと思ふ。我々の先祖である芭蕉が，かならずや我々の外国への長い旅程の道案内となってくれるに違いない」(全集13巻377-8)との感慨も漏らしていた。芭蕉が没した花屋跡に建立された句碑に藤村夫妻は「草百合，なでしこ，桔梗など」を献花しているが，その句碑に刻まれていたのは，芭蕉の辞世として知られる，かのあまりに有名な一句である。ここでは，その外国語訳をいくつか引いておこう。

Sick on a journey
Over parched fields
Dreams wander on
(Lucian Stryke, 1985)

Malade en voyage
Mes rêves

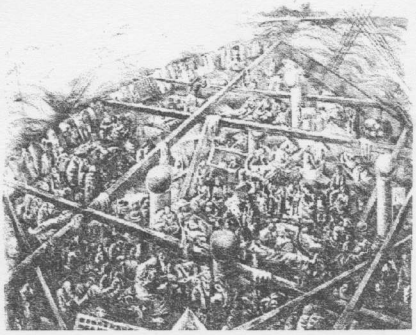
Par les champs desséchés
(Muraoka/ El-Etr, 1979)

Enfermo durante et viaje
Mis sueños
Por los ramos yermos
(Francisco F. Villalba, 2000)

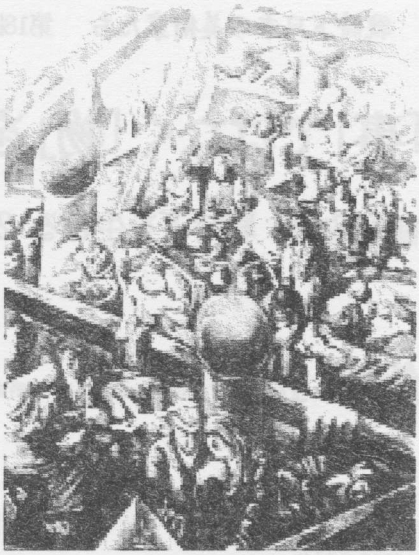
最近の外国語への翻訳を，順に英語，フランス語，スペイン語であげてみた。＊4「旅に病んで　夢は枯野を翔けめぐる」。だが，俳句を引いた記事を『大阪朝日新聞』昭和11年7月17日付けで掲載された段階では，まだ藤村はその意味するところを，十分には掴んでいなかったといってよい。南米へとむかう大阪商船の貨客船，リオ・デ・ジャネイロ丸に乗り込んでみてはじめて，藤村は自分たち一行が，850名ほどの南米移民たちと同船であることに気づいたようだ。大多数はブラジル行きだったが，そのなかには，今回を最初としてパラグアイを目指す8家族のあったことも，詩人は漏らさず報告している。船上の藤村は，もはや生きて故郷の土を踏むあてもない旅に出る老人の悲嘆に接し，旅程半ばに，船中で病を得て死んでいった幼な子の水葬にも立ち会った(旧全集14巻172-3)。こうして芭蕉の辞世は，もはや単なる文学的感傷にはとどまらず，移民たちの現実，望郷の愛惜を映す切実な詩句へと，藤村の船旅のあいだに劇的な変貌を遂げていった。移民船での体験に洗われた芭蕉の辞世―そこに木霊(こだま)するのは，ブラジルに渡ったポルトガル語の言葉，サウダージョsaudadeが，もっとも痛切にくみに汲み上げる，流離における郷愁，人生の哀歓だったのではなかろうか。

日本移民の寄る辺なき境涯に同情し，文学や藝術を拠り所に励ましと労わりの志を伝えること――それはいつしか藤村の胸のうちで，ブエノスアイレスの国際ペンクラブ総会に日本代表として出席するという公式任務にも増すだけの重みを宿した，文学者としての真摯なる責務へと成長していった。そして，ここまでくれば，もはや明らかだろう。島崎藤村はまた，自らの南米への「使い」を，自らの偉大なる文学的先達の旅程にも重ね合わせていたはずだ。東シナ海を越えた雪舟の明代中国への船路，そして「百代の過客」traveller of a hundred agesとしての松尾芭蕉の一所不在の旅の生涯が，自らの人生最後の海外への旅，そして移民を南米へと運ぶ航路の体験と共鳴し，渾然一体となって，藤村の「巡禮」をかたちづくるに至っていたことも，いまや納得されることだろう。＊5

そして最後に一言付け加えるならば，ここには，帰国後，晩年の島崎藤村の文学活動を再評価するための，幾つかの道しるべもまた，くっきりと見えてくるはずである。＊6



ラザール・セーガル　移民船　1939-41（右は部分）



［注］

＊1　この箇所は，鈴木貞美・岩井茂樹(編)『侘び．寂び．幽玄』水声社，2006年，所収の堀まどかの充実した論考「芭蕉俳諧は究極の象徴主義か」でも検討されている。

＊2　このあたりの最近の再検討としてはRustom Bharucha, *Another Asia, Rabindranath Tagore and Okakura Tenshin*, Oxford University Press, 2006を参照。本書については機会を改めてとりあげたい。

＊3　鈴木貞美『生命観の探求』作品社，2006。

＊4　ポルトガル語訳をまだ発見できないが，あるいは日系ブラジル移民の方自らの手になる翻訳も存在しているのではないだろうか。ご存知の方があれば，ご教示いただけると幸いである。

＊5　この点については，拙稿「移民へのまなざし サンパウロの藤村揮毫歌碑を訪ねて」(『図書新聞』2840号，2007年10月6日付け)参照。藤村揮毫の歌碑が建立されて今に至るまで大切にされている。サンタ・クルス病院のほど近くには，リトアニア生まれの流浪の画家，ラザール・セーガルの美術館がある。セーガル畢生の大作《移民船》(1939-41)は，藤村の南米体験を理解する格好の背景画となるだろう。のみならず，そこに描かれた，運命に翻弄される無名の群集として移民の姿は，南米滞在を経た藤田嗣治の《アッツ島玉砕》や《血闘ガダルカナル》などにも，あらたな光を投げかけるはずだ。両者を比較すれば，20世紀中葉の国家主義の総動員体制のもとで民衆が体験した強制移送deportationの残酷な運命を仮借なく描写する点で，意外な共通性が見えてくる。

＊6　藤村が1901年につくった「椰子の実」の詩が，大中寅二作曲，東海林太郎歌唱により国民歌謡として大成功を収めるのも1936年のことだが，ここにも藤村の南米巡礼の影が認められよう。また帰国後の藤村が海外の移民子弟をも念頭において世界児童文学選集の編纂に尽力したことの意味も，あらためて検討されるに値するだろう。前者に関してはKenji Toyama, Shimazaki Tôson as the 'National Poet' in 1936，後者に関してはYuki Meno Shimazaki Tôson and the Official Literature for Children in the 1930s and 40sの2論文が，*Beyond Binalism : Discontinuities and Displacements in Comparative Literature*を主題としたInternational Comparative Literature Congress in Rio de Janeiro, Aug.3, 2007で口頭発表されている。

＊本稿は註6に触れた国際学会における「島崎藤村パネル」で，外山健二・目野由希氏の2論文への導入として口頭発表した拙稿"Between Asian Nationalism and Western Inter-nationalism : Shimazaki Tôson's Participation in the International P.E.N. Club in Buenos Aires in 1936"を日本語に自由訳したものである。島崎藤村パネル立上げにご協力いただいた，外山・目野両先生，また東アジア・セッション全体を取り纏められた上垣外憲一先生，さらに会議全体を成功裡に導かれたEduardo Cutiño教授に，この場を借りて感謝申し上げます。